

# 「カイザー関大」

佐々木 徹

昭和32年の秋季リーグ戦の優勝をあとにして、しばらく低迷時代が続くのですが、昭和33年には市口政光、福家義夫を初めとする素質ある新人が12名入部し、第2の黄金時代の基礎がこのときつくられたのであります。

昭和33年度をもって、松井前監督がお仕事のご都合で監督を辞任されました。それにともないOB会で推挙されまして、私が監督に就任することになったのでありますが、レスリング界における「関大」の名声がつとに轟いて、ますますの発展を願われていた時期でしたので、その責任の重大さを肝に命じて、微力ながら先輩諸氏のご協力をお願いして、お引受けすることになりました。以来昭和42年度までの9年間、数々の栄光の足跡を残した現役諸君とともに「カイザー関大」と叫びつつ、OB諸氏のご支援のもとに、歴史の一コマコマを歩んでまいりました。

思えば、在任中は、「第2期黄金時代（昭和35年より37年の、木田（現堀江）、市口、伴各主将の時代の5連覇）」それに昭和39年の故村山主将以後12連覇の金字塔をうち立てた時代の大半（昭和42年の8連覇まで）の「西日本のゆるぎない王座の時代」とリーグ戦におきましては順風満帆でありました。一方、個人戦では市口政光君の東京オリンピックでの金メダルの獲得を頂点とした数々の栄光、それに国内外に栄光の足跡を残した多数の名選手が輩出致しました。まさに「カイザー関大光あり」、「カイザー関大力あり」と「嵐劈く鳳」のごとく躍進を続けたのであります。これらは、創部以来の諸先輩の情熱と研鑽がここに開花したのであります。

30周年を記念しての部誌に、私が在任中のあゆみを綴ることは大変な誇りでありますことを皆様にご感謝致しております。また西脇義隆コーチを初め指導陣に加わって頂いた諸氏のご尽力があってこそ、この大任を無事に果たしとげることができたものと感謝致しております。

回顧しながら資料を参考に綴って行く前に、故人になられた関係者諸氏のご冥福をお祈り致します。

## 昭和34年

監督就任の春3月、さい先の良いことにこの年の米国遠征日本代表に時の4回生西脇義隆前主将が選抜されて渡米、全米選手権大会においてフリー・スタイルのフェザー級において優勝しました。続いでグレコローマン・スタイルでもフェザー級に2位と大活躍で、ここしばらくの関大レスリングの不振をふきとばしてくれました。優勝の喜びを語る西脇選手の話にこういうのがあります。「大阪市立汎愛高校時代は柔道（初段）をやり、大学に入ってはじめてレスリングを習った。昨年関西選手権で優勝したばかりだ。全米選手権をとったのは先輩の横山さんや同大先輩の岩野さんにつづく成績だが、関西大学の名誉のため最後までねばったことが幸運の金メダルとなった。」

これを土産に西脇は卒業しましたが、この年の主将は住本で、副将山本、岸上、金谷、主務三好（現樋口）の4回生のもとに春季リーグにそなえたが健闘も空しく2位に甘んじ前年度からの劣勢を挽回できませんでした。この時の関学は前年度とほとんど変らない陣容で、予想には関大の劣勢が伝

えられていたのであります。

毎日新聞社後援、昭和34年度西日本学生レスリング春季リーグ戦は29、30、31の3日間大阪アペノ体育館で行われる。参加は関学、関大、近大、同大、名商大の5校である。前季優勝の関学は沖一人だけの卒業でウェルター級に清水、沼、ライト級に出雲、藤井と重量級に自信ある布陣を見せている。フェザー級鎌田あたりで食い込めば勝利はきまったようなもの。フライ、バンタム級ではバンタム級の沢井が光っている。

関大は森川、西脇が卒業、西脇は米国遠征で全米選手権をとった選手だけに、彼の卒業は関大には痛手だ。ここは重量級できめる関学とちがい各級でまんべんなく得点をあげなければならない。フライ級市口、バンタム級山本、ライト級金谷、ウェルター級中川らが関大の中心線、これが縦に関学を刺しつらぬけるが関学の重量の壁が関大の中心線をはねかえすが本リーグの注目点だ。

関学、関大を追う近大はすでに全米選手権者を生んで関西学生レスリングに確固とした位置をかためた。フライ級立花、バンタム級岡本、木田、ライト級喜田ら中心選手に加え新人高橋がウェルター級に強力な得点源としてひかえている。一季ごとに見違える進境を見せる近大は関学、関大に大きな刺激をあたえるだろう。

同大は最近の沈滞をどこまで脱するか、名商大はまったく未知数だ。(毎日新聞)

しかし、この春の淡路の洲本での合宿で木田等3回生と市口等の2回生が地力をつけ、特に三態山々頂迄のうさぎ飛びなどのハード・トレーニングが功を奏して春のリーグ戦での経験と併せて一段と成長しました。

秋のリーグ戦には、台頭した新戦力を軸にのぞみましたが、またしても関学の壁を破ることはできませんでした。

個人戦において春の合宿に引続いての強化練習の成果が表われました。この年の関西選手権大会に竹田がフライ級に優勝、同伴が新人ながら2位、バンタム級に市口が優勝し彼は後の足がかりをつかんだと述懐しております。

この年の新人は前年にくらべて少なく伴、光富、西本等でした。

## 昭和35年

この年は33年度新人組の大量の3回生が力をつけ、木田(現堀江)主将のもとに梶原(現白井)、竹田、矢路、瀬脇の4回生の指導よろしきを得て、春季リーグ戦に優勝しました。関学は前年とは逆に多数のポイントゲッターを卒業させており、予想も「実力接近で興味あり」と報ぜられました。

毎日新聞社後援、昭和35年度西日本学生春季レスリング・リーグは11、12、18、19の4日にわたり関学体育館で行われる。参加校は関学、関大、同大、近大名城大、名古屋商大の6校。これまでは関学、関大の争いだけがリーグの興味だったが、今季は関学、関大、同大、近大の4校の実力が非常に接近しているので、興味深いカードがそれだけふえたわけである。

○……関学は清水、鎌田はじめポイント・ゲッターが多数卒業した痛手はあるが、今春5人の若手選手を渡米させて、経験からくる自信と技のバラエティーを一層つけて来たことが大きなプラスとなっている。関大は昨年のメンバーをそのままにこんどこそ四季連続優勝の関学を倒そうとはり切っている。関学、関大のメンバーをくらべると関学は出雲(ウェルター)沼(ライト)藤井(ウェルター)久保(フライ)坂本(フェザー)大林(フライ)石田(バンタム)関大は市口(バンタム)福家(ライト)神谷(フェザー)森(ミドル)梶原(ウェルター)木田(ライト)矢路(ウェルター)が主力。とくに関学は出雲、沼、久保がほぼ確実に3点をあげる。関大では関西で無敵といわれる市口と森の2点がかたい。ウェルター級までは2人の選手が出場するのでこれらの選手が相手校の頼む選手と当たってそれを食い、勢いにまかせて一つの級で2点をあげれば形勢は大きく変わる。とくに関大のたむ福家が関学の沼とあたるかどうか試合を大きく左右する。

○……近大は木田、池田大、池田小、宮崎、同大は三井、小島らに関、関に切り込む実力がうかがわれる。これらの4校の実力が接近してしまったのは同大、近大の力がのびてきたというより、関学、関大の実力低下が原因だと

いわれるが、この点からも関学、関大2校の奮起がのぞまれる。

この春より第2期黄金時代が始まります。秋季リーグ戦も同様健闘し2連勝を飾りました。時のマネージャーが「関大スポーツ」に次のように秋季リーグの様子を記しております。

西日本学生レスリング秋季リーグ戦は11月11、12、13、3日間にわたり、名古屋商大体育館で行われたが、関大は優勝戦に関学を破り春に続き2連勝を飾った。前日の10日に名古屋に着いた1行は、宿泊所に着くや早速ウエイト調整のための準備にとりかかり、近所のフロ屋へかけ込む者、トレーニングシャツを5、6枚着こんで走る者、とてんでこ舞の忙しさ、試合場は嵐の前の静けさで強い照明に照らされたマットに、コンディション調整の木田、石井組と市口、伴、山本の5選手が軽い練習を行い他校の注目をあびていた。特にオリンピック帰りの市口選手の新しい技は観衆の目をみはらせていた。翌日は午前7時より8時までに計量を行い、9時より開会式、優勝杯、楯を返還した本学レスリング部は全くフランクな気持ちで初日に名城大を9対2同志社を8対3、2日目近大を6対3（2引分け）名商大を9対1（1引分け）と勝ち進み、最終日の関々戦を残して順調に勝ち残った。一方、関学は今年の春5選手をアメリカに送り、最良の選手をそろえ最終日まで4連勝し、優勝決定戦にのぞんだ。フライ、バンタム級で2点を失いあわや、と思われたが、市口は渡米選手の久保を2分12秒で簡単にフォールし続く松浪、神谷、福家も勝ちリードした。重量級においては3点を失い苦戦したが、結局5対5（1引分け）同点となり、フォール数が3対0で関大の優勝を決定した。

就中、市口政光は、ローマオリンピックに関大レスリング部として初のオリンピック出場の栄誉を得、惜しくも7位となったのですが、関大レスリングの名を高らかにしてくれた功績は大であります。彼はこの時、グレコローマンスタイルのバンタム級に出場、グレコでもフリーと同様練習次第で好成績をあげることができるということを示し、世人にグレコローマンに対する認識を深めさせたのであります。この五輪出場に先だつての最終予選会で、「バンタム級は最激戦のクラスで、桜間、大谷、市口、吉田、……といずれをとっても実力伯仲」といわれた中を勝ちぬいての「初めての外国遠征」をオリンピックで、それも3回生時に、果たすという快挙をなしとげたのであります。最終予選会でトップにおどり出た市口の成果を、当時随行していた2回生の伴が「ローマ近し」の電文で送り知らせて、関大関係者一同長年の夢の実現を「代表決定」に託したのであります。

この年の新人は、石井、山本、中川、井宮、遠藤、小沢、脇田等が入部をしております。市口の五輪出場に刺激を受けてこの年の関西選手権大会には、同級生の高田がフライ級に優勝、同じく松浪がフェザー級の2位に入賞、OBで佐々木がウェルター級優勝、同OBの岡本が2位、OBの森川がミドル級の2位、また市口がバンタム級で優勝を成しております。

## 昭和36年

この年は4回生が12名、いずれも充実して関大のチーム力としてはかつてない強力な陣容をほこりました。主将市口、副将福家、主務松田、荒武、神谷、桂、岸田、高田、松浪、森、吉村、中野の4回生に加えて下級生にも好選手を多数擁していました。

春のリーグ戦は5戦全勝で3連覇を成しましたが、その時の概要を松田主務が「関大スポーツ」に次のように報告しております。

西日本学生レスリング選手権大会は、5月17日より3日間アベノ体育館で6校が参加して行なわれた。軽・重量級に一段と充実さをみせている本学は、昨年秋に続いて同勝点、関学を決勝戦で破り、3連勝を飾った。この大会で本学は昨年のメンバーから市口（バンタム）を軸に伴、高田、山本などが健在であり、軽量級においては圧倒的な強みをみせた。とくに昨年のローマ・オリンピック出場の市口選手はみごとな技でフォール勝ちして注目をあび

た。

初日の17日、名城大を10対1と2回戦にも名古屋商大に7-4で軽く勝ち進み、18日の対同大戦に駒を進めた。つづく同大には9-1と圧倒的勝利。近大戦にも荒武、山本、伴、高田、市口と軽量があいついで勝ち神谷、石井などの重量級でも判定で試合をものにした。最終日の第5戦は対関学で、ともに勝点は同じのため、関学は本学打倒と最良の選手をそろえ優勝決定戦にのぞんできた。

試合は、荒武、山本、伴、高田とフライ・バンタムの軽量級はあいかわらず強いところをみせ、松浪は引分けて、市口は関学岡本を26秒でフォール勝ちし、神谷も判定で勝った。桂は関学小西に2分25秒体固めで敗れ、つづく脇田も関学羽田に判定で敗れた。中量級で2点を失いあわやとみられたが、重量級石井は判定勝ち、松田も関学大井に36秒体固めでみごとな技をみせた。結局、これで本学は8-2で関学に快勝し、西日本学生リーグ戦に5戦無敗で輝く3連勝をなしとげた。

秋のリーグ戦にも全勝して、4連覇を難なく成しました。

個人戦では、市口のグレコでの五輪出場の影響で「グレコの関大」といわれる素地ができて、この年横浜で開催された世界選手権大会の予選会には、3月の第2次予選でグレコに本学より、フライ級山本3位、バンタム級市口1位、同伴4位、ライト級石井3位と最終予選出場資格を獲得しております。4月28日からの最級予選会ではバンタム級市口1位、同伴3位で、市口は代表の座をまもりグレコの第1人者への道を着実にふみかためました。

本番の世界選手権大会では、期待されていた市口は実力を十分に発揮できず惜敗しましたが、この経験が彼の研究熱心さを一段と強めて東京五輪へと夢を馳せさせたのであります。

この年の全日本選手権大会に市口がグレコのバンタム級に優勝を飾り、関西選手権大会ではフリーでフライ級山本1位、バンタム級で伴1位、同光富3位、ライト級で福家1位、ライト・ヘビー級で森川（OB）2位の成績でありました。

この年11月より45日間におよぶソ連、欧州遠征が東京五輪強化策の一環として実施され、これに参加した市口は8勝1敗の好成績をあげて確実に成長していったのであります。

この年の新人には村山（昭和51年死去）、藤井、平田、鶴谷、岸本が入部しました。

## 昭和37年

この春大量12名の4回戦を卒業でおくりだして、極端に戦力は低下しました。その中で伴主将、光富副将、西本主務のもとによく健闘し、春季リーグ戦は苦戦を続けながらも優勝し5連覇をなしとげました。これは昭和29年秋より31年秋までの5連覇につぐ快記録であります。

秋季リーグは武運拙く3位に甘じ残念ながら連勝の新記録はなりませんでした。この年の5連覇迄が第2次黄金時代といえましょう。新人部員には、早淵、西山、今村、近藤、松田（現田辺）、中井、丹司の有望選手7名がいましたがチーム全体としては実力を十分に発揮できず、35年春から37年春までで連勝がストップしたことは本当に残念であります。

但し個人的には、松井前OB会長を団長としてのソ連ルーマニア遠征に山本定夫がフライ級の選手として参加し好成績を納めて帰国、以後の彼の選手生活に大いにプラスとなったのであります。

また、市口政光（OB）はアメリカ・トレード市で開催された世界選手権において日本代表選手として初のグレコローマン・スタイルで世界チャンピオンとなったのであります。この快挙は当時グレコの関西といわれた、その面目躍如たるものがあり、その頂点に立った感がします。また、日本のレ

スリング界においてその後グレコローマン・スタイルのレスリングをするものの励みとなり底辺の拡大に大きく貢献したものであります。

続く第4回アジア大会にグレコローマンのバンタム級に出場し圧倒的強さで金メダルを獲得したのであります。ここに、市口政光君の「念願果たした喜び」と題する一文を紹介致します。

私が本格的にレスリングをはじめた年は、大学入学と同時に関西大学レスリング部に籍を置き、大学2年生で初めて、関西選手権で優勝し、この頃よりレスリング競技に興味を覚え、寝ても起きてもレスリングの事を考え、ひそかに第1戦級に野望を燃やしはじめた時代でもありました。大学3年にしてローマ・オリンピック最終予選で優勝し、おもいがけなく、晴れてローマ五輪の代表に選ばれました。しかしその時代のグレコローマン・スタイルは、日本に於ては、技術が欧州各国にくらべて低く、結成以来2年間という歴史の浅いものでした。当然ローマ五輪の結果は、火を見るより明らかでした。しかしフライ級で平田さんが4位に入賞、北村さんが6位、小生が7位とよく健闘し、東京五輪には、少しは立派な成績を残す自信をもって帰ってまいりました。その後、昨年の6月横浜で世界大会が開かれ、我々も健闘し頑張りましたが、まだまだでした。その年にトルコよりコーチを招き技術指導をしてもらって試合に望みましたが、惨敗の結果となりました。

その年の11月ソ連、欧州遠征で、欧州の技術を目のあたりに見て、大きく自信をもち、又成績も8勝1敗とこれ又強く自信をもった幸いです。今年の米国の世界大会、アジア大会と優勝、その結果、3年目にして念願を果せてこの上もない喜びでした。新たな闘志と努力をもって東京オリンピックに頑張る覚悟です。(日本レスリング協会機関誌)

現役では、この年より始まりました西日本学生選手権大会に、フリーのバンタム級で山本1位、同平田3位、フェザー級伴2位で、12月の関西選手権大会には、フライ級村山3位、バンタム級山本1位、小沢3位、フェザー級伴1位、ライト級早淵3位の成績でありました。

## 昭和38年

3月に、伴義孝、石井正樹両名がこの年の米国遠征日本代表に選抜されて渡米、伴はグレコローマン・スタイルのフェザー級で第3位に入賞しております。伴現監督は、この遠征が一つの契機となって今日関西大学で教えている彼があるような気がします。帰国後、日本体育大学に入学し苦学の末卒業、その後単独でアメリカ留学し、3年にわたる刻苦勉勵の末いろいろの成果を身につけて帰国、母校関西大学の文学部講師を経て現在助教授に昇進され、大学は勿論日本レスリング協会理事として内外多方面で活躍している事をご承知の通りであります。

同年7月スウェーデンで開催された世界選手権大会にグレコローマンのフライ級に出場した山本定夫は5位に入賞し、昨年のソ連遠征の成果を発揮しました。

市口政光、山本定夫等の海外での大活躍、とりわけ世界選手権大会での好成績に刺激され各部員も主将石井、副将山本、主務井宮、遠藤、小沢、中川の4回生を中心に練習に熱をおび、春のリーグ戦は第2位と上昇の気配を見せました。

昭和38年度西日本学生レスリング春季リーグは6月7、8、9の3日間関学体育館で行なわれた。戦前の予想では前回の優勝校近大は主力選手が卒業したため、高く買われず、本学、関学、同大の三つどもえの接戦が演じられそうであった。事実本学も優勝をかけて異常な闘志を燃やし第1日目の第1試合の名商大に9-2で大勝。幸先き良いスタートをきった。第1試合でははやくも関学一同大の強豪がぶつかり大接戦の末6-4で関学が勝ちを収めた。やはり軽量級に圧倒的な強味を示す関学に分があった。さて注目目の第2日目関学の軽量級に対して団体戦に伝統の強味をもつ本学が猛然と立ち上がった。5月の西日本学生選手権で2位にフライ級の村山、ウェルター級石井が、3位にフライ級山本邦、フェザー級佐藤、ライト級中野の3人がはいつている。これら選手が中心になって士気を高めていたのである。いうなれば気分充分であった。が軽量級のフライ級、フェザー級で村山、山本、佐藤

平田とも判定で破れ、バンタム級小沢が辛くも判定で勝っているだけだった。よって興味や期待は後半戦のライト級以下の重量級にかけられた。すなわちライト級石井が素速い動き、安定した試合運びで試合開始後わずか1分16秒で簡単に体固めを決め2点目を取った。これで緊張がゆるみ安堵したかに思えたその矢先、同級中野が破れ、ウェルター級早淵、西山が体固めで破れて打倒関学はならなかった。しかし最後の試合のミドル級藤井が今までのウッパンを晴らすかのように元気よく対戦、技の応酬で奮闘しついに8分5秒体固めでしとめた。最後の力をふりしぼっての戦いは闘魂のこもった白熱化した試合を見せ満足感がわずかながらただよった。結局全試合を通じて対関学戦の1敗だけで4勝して2位に食い込んだものの優勝はならなかった。学生レスリング界のピカール山本定が世界選手権出場のため欠場したとはいえ、もう少しのふんばりが欲しかった。5月の西日本学生選手権での上位入賞者が多いだけに残念な感が強い。今後の奮起活躍に期待する。(関大スポーツ)

続く秋季リーグ戦においても第3位ではありましたが、新人に中野、山本、佐藤、住谷、井加田、加藤等を迎え、翌年以降のリーグ戦が楽しみとなったのであります。

この年国内の個人戦では、西日本学生選手権大会において、フリースタイルのフライ級に村山2位、同山本(邦)3位、フェザー級佐藤3位、ライト級中野3位、ウェルター級石井2位と新人が台頭してきております。また、プレ・オリンピックとしてソ連、米国、ハンガリー、ルーマニア等8カ国が参加した東京国際スポーツ大会兼全日本選手権大会には、グレコのバンタム級で市口(OB)が優勝、伴(OB)がフェザー級の5位に入賞しております。

## 昭和39年

果せるかな春季リーグ戦は5戦全勝で4シーズンぶりに優勝し、村山主将、藤井副将、平田らを中心に秋に向けて再度連覇を目指して猛練習を行ないました。

秋には「粒ぞろいの関大」と評されて、「まず今春優勝して同大から王座を奪い返し16回目の優勝を遂げた関大は軽量級に、村山、山本、重量級に中野、藤田と各クラスに粒ぞろいの選手をそろえ、バランスのとれたチーム力では相変わらずリーグ随一だ」の評判どおり6戦全勝して連続優勝を遂げたのであります。以後6年計12シーズン連続優勝という未曾有の快挙をなしとげる第一歩を踏出したのであります。

すなわち、39年の故村山主将、40年の早淵主将、41年の中野主将、42年の岡田主将、43年の倉橋主将、44年の北川主将の6カ年の長きにわたって連続優勝という無敵の金字塔をうちたてたのであります。この時期が真の黄金時代ではないかと思えます。

その頂点となったのが、アジアで最初に開催された東京オリンピック大会において日本が5個の金メダルを獲得しレスリング王国を世界に示した時、その一人に市口政光(OB)が金メダリストとして燦然と輝いたことであります。市口先輩に続けが大きな原動力となったのであります。

彼は世界選手権大会(37年)に優勝した後、無敵を誇り、我々OBの念願していたオリンピック大会、それも特に日本で開催された東京オリンピック大会で優勝したことは、本当に関大レスリング部関係者全体として喜びとするところであります。彼は関大卒業後、東京に就職単身下宿生活を営みながら、東京の各大学で練習を積み重ねて東京オリンピックに臨み、各国選手からマークれさる中をよく健闘し、スポーツマン最高の栄誉であるゴールドメダリストの栄誉を獲得念願を果たしたのであります。

この年のその他の個人戦は、西日本学生選手権大会でフリーで、フライ級山本(邦)3位、バンタ

ム級岡田3位、ライト級中野2位、ミドル級藤田2位でありました。また、東京オリンピック最終予選兼全日本選手権大会においては山本定夫（OB）が2位に入賞し「関大」の気をはいております。

この年の新人は、岡田、大津、石井、藤田、渡辺、大藪と有望選手が引続き入部しております。

## 昭和40年

さて目標は連勝を続けることにあります。こうして春季リーグ戦に臨み、早淵主将、西山副将、今村主務、近藤、松田、丹司、中井の4回生を中心に部員一同日頃の練習の成果を発揮して、完全優勝で3連勝を飾っております。

このリーグ戦は楽な結果に終わりましたが、秋にはポイントゲッターの負傷になやみ「関大、苦しい布陣」と評されて臨まなければなりませんでした。

毎日新聞社後援の西日本学生レスリング秋季リーグ戦は25日から4日間大阪府立体育会館で行なわれる。米春には広島商大の加盟も予定され、その他2、3の大学でも同好会をつくるなど発展の機運をみせている。また今秋のリーグ戦から八田日本アマチュア・レスリング協会会長寄贈の八田杯を最優秀選手に、松井杯が敢闘選手に贈られる。

今春3シーズン連続、18回目の優勝を果たした関大も秋は苦しいリーグ戦となりそう。フェザー級の佐藤を負傷で欠き、ひざの悪い早淵を起用するなど苦しい布陣。ウェルター級の倉橋、長井両新鋭は春より一段と強くなっており完全に戦力になった。だが同大も佐藤の欠けた関大とは5分以上の星勘定がつけられる。丹羽をライトからウェルターにあげこのクラスの2点を確実にあげようというねらい。とにかく同大はこのリーグ戦で優勝しなければ当分優勝できない。主力選手がそろって来春卒業するので今秋にかける意気込みもうかがえよう。

3位の関学はどうか。フェザー級阿部の戦列復帰でぐっと厚味が増し軽、中量級では関大、同大に決してヒケをとらない顔ぶれとなった。38年秋同大初優勝の時と同様三つどもえ戦、三すくみでポイント数で優勝が決まるケースになりかねない。近大は鶴丸、香月といった全日本学生柔道の第一線選手を重量級に申し込んだが出場資格がとれず、エントリーに穴があいたのは気の毒。両選手が出られれば面白い試合になっただろう。

名商大、名城大の名古屋勢も今春新人の活躍で上位校との差をぐっと詰めている。上位3校が優勝争いに目の色を変えているとこの名古屋勢や、桃山大に足元をすくわれることも考えられ、ましてやポイントで優勝を争うような接戦にでもなったりするとこれら下位校との対戦のポイントがものをいうことになる。それだけに上位校も慎重に戦う必要がある。ともあれ優勝戦線のアヤしい雲行きとともに春活躍した新人群の成長が楽しみだ。（毎日新聞）

苦しい中を連覇を目指して、結果は6戦全勝で4連勝をおさめました。このリーグ戦の関大の奮闘ぶりを次のように書いております。

……さて、昨秋のリーグ戦は、またも関大が関学、同大両校必死の挑戦をはねのけて、4シーズン連続、19回目の優勝を遂げた。しかし、関大の優勝は危ない橋の渡りづめだった。関学は川畑、同大は川端、岩野というエースを軸に、リーグ優勝最後のチャンスとばかり激しく関大に迫り、両校とも関大をきわどいところまで追い詰めた。だが結果は両校とも力尽きて関大の粘りに届いてしまった。とくに印象に残った最終試合、優勝をかけての同関戦は白熱した好試合だった。軽量級で3-0とリードされた同大はバンタム、フェザー級で3-2と追い上げ、同大岩野、関大早淵の対戦を迎えた。重量級は川端、丹羽を擁する同大が絶対優位にあったので、この一戦が勝敗の重要なポイント、だが関大の主将早淵は早くから両ひざを痛めて戦列から離れていた“ボンコツ”選手。佐藤（関大）を負傷で欠いたため無理を承知の出場。戦う前から早淵はハンディを背負っていただに“引き分け作戦”は目に見えている。しかし、元気な岩野（同大）にはその引き分けすら望み薄すとみられていた。ところが早淵は闘志をふりしぼって立派に役目を果たし、関大を優勝へ導びいた。この気力こそ、すべての選手が見習うべきで、八田賞の栄誉も当然だろう。（学連プログラム・記者の目）

この年3月、佐藤秀雄が全米選手権大会に出場するため、米国遠征の日本代表に選抜されて渡米しております。そのチームのコーチとして伴現監督が同行しております。彼はその後カリフォルニアのハウスアン市の体育局を中心に体育研究活動を続け、カリフォルニア・コーチズ協会等でその成果を

表わし、昭和42年に帰国しました。

個人戦では、西日本学生選手権大会において、フリーではライト級中野1位、ミドル級藤田2位、同好井3位でありましたが、この年より始まりましたグレコにはさすが伝統的に強く、フライ級松田1位、バンタム級山本1位、中井2位、樋口3位、フェザー級佐藤1位、丹司2位、ライト級中野2位、ウェルター級井加田3位、ミドル級藤田1位、好井2位と大活躍をしました。また全日本学生選手権大会ではグレコのフライ級に山本が2位に入賞しております。

この年の新人は、倉橋、長井、笹井、村上、高祖らの有望新人が入部しております。

## 昭和41年

3月18日、アルゼンチン建国50周年記念国際レスリング大会に私（佐々木敏）が監督で選手8名と遠征の途につきました。その中には東京五輪のフライ級優勝者吉田、それにメキシコ五輪の重量級のホープと目されていた関大の藤田が選抜されております。世界選手権大会の前哨戦でフリースタイルの6階級に優勝し、そのうちライト・ヘビー級で藤田もよく健闘し優勝を飾り団体優勝に花をそえてくれました。アルゼンチンの同大会の前後にメキシコ、アメリカを回り強化対策の一環に転戦を行いました。同じ頃、中野憲一主将が米国遠征の日本代表選手に選抜されて渡米しております。

先の遠征が藤田によかったのでしょうか。同年6月の世界選手権大会（アメリカ・トレード市）にグレコのミドル級に日本代表として出場しました。この大会に松井清前会長が団長として指導にあたられております。

藤田は世界選手権大会では、さすが強敵ぞろいの重量級において惜敗しましたが、その後彼自身の強化対策のため松井団長の指示で米国に単身留学し足かけ2年間練習することになりました。帰国してからは、関西の重量級の第一人者の他位を不動のものにし現在も活躍中であります。

同年11月、タイのバンコックで開催されたアジア大会には、現地協会の組織の未熟さから準備運営としてのアドバイザーの招聘要望があり、日本協会はこれを受けて松井前OB会長に白羽の矢をたて、開催の数カ月前よりタイにわたり諸事万端滞りなくアドバイザーの大役を果たされました。氏の現地での指導はなみなみならぬものがあり、その努力のたまものと貢献振りからタイ国協会並びに政府から多大の感謝を受けたのであります。

春のリーグ戦は、「首位不動の関大は相変わらず層の厚さを誇り」と臨みまして、「苦しかった関々戦」を含めて8戦全胜で5連覇20回目の優勝をとげました。この原動力は中野主将、佐藤、井加田、加藤、山本、住谷らの4回生の気迫でありました。その足あとを当時のマネージャーが残っております。

リーグ戦、それは、我々関大レスラーが年間通じて最もハッスルし、又しなければならぬ試合であることを念頭に置いて頂きたい。そして関大は、過去に於て連続4回、通算19回という優勝記録を樹立している。今大会は、その連勝記録を更に伸ばさんと、レスリング部が一弾となって練習に打ち込んだ。幸いにして、優勝を争うであろう関学、同大に於てはポイントゲッターとなる選手が多数卒業してしまったのに比べ、この2年間は関大は、その傾向がなく、関大優勝というのが後援者である毎日新聞社の言であった。

さて今大会から広島商大が新しく加盟し、計9校のリーグ戦となったのであるが、9校がリーグ戦を消化するには、5日という日数が必要である。しかし減量の状態を5日維持することは、健康管理上良くないとされ、関大、近大、同大が、名古屋にて、名商大、名城大と、そして、桃山大、関学は広島にてある程度消化し、2週間後



に大阪府立体育館別館で再び争うことになった。

そして開幕。予想通り関大は、まさに破竹の進撃。優勝候補の一角に挙げられていた同大に対して10対1と快勝した。そして大阪入りしても他大学を倒して最終日、いよいよ、7勝同じで無傷のまま関関戦で決勝ということになった。

リーグ戦開始前、審判の講習会などで、関学がかなり厳しい練習をしているということを風の噂に聞いていたのであるが、その心境には何か著しいものを感じずにはいらなかった。追う強さ、追われる弱さが無言のうちに展開されていたのかも知れぬ。兎に角捨て身の関学は「関大楽勝」に待ったを掛けたのである。フライ級の第1試合を関大がとれば、第2試合は関学がとる。バンタム級で先行すれば又第2試合をとられる。フェザー級に於ても又同様1対1であった。まさにこの情景に至っては観客は手に汗を握り、選手は汗にまみれ、応援者は、その声を枯らす、それこそ壮烈なデッドヒートを展開、予想にあった「関大楽勝」は何処ふく風であった。しかし関大は負けない。何故なら、日頃の練習できたえられた身体に、伝統を守り抜こうとする強い精神力が試合の後半に表われ、ライト級では、1勝1引き分けと負けを与えなかった。結局6勝4敗1分けで勝利を掌中に納めたのである。今その悪夢の様な試合を離れてみると、本当に危い試合であったかも知れぬが、それはむしろ関学の玉碎戦法を褒めた。しかし秋季には、この経験を大いに役立てて、追われる関大としてではなく、再び優勝をねらう関大として臨もうというのが、部員一同の意見である。体育館の本館に於て、全く同日行われていた柔道大会。もし柔道部が西日本で優勝していたら、我々以上に喜んでもらえたかも知れぬ。我々関大レスラーにとっては、優勝して当然という不文律があるかも知れぬ。過去の輝しい経歴からしても、しかし我々は、人に喜んでもらうために、レスリングするのではない。自己の限界を知り、それを超越して行き、過去にレスリングを開拓して来られた諸先輩に続き、追いつき、そして追い越す。喜こんで頂ければ、勿論それに越したことは有りませんが例え喜んで頂けなくても、我々は諸先輩の偉業を見習い、受け継ぎ、そして更新して行く所に、関大レスラーとしての誇りと喜びを感じるのです。このリーグ戦に於ける優勝は、決して派手なものではありませんでしたが部員一同の様な接戦に対しても負けなという自信を、その日恐らく感じたことでしょう。又いく人かは、宿舍のベットに寝て、天井をながめながら、胸の中央が温くなってくる様な喜びを感じたのです。(関大スポーツ)

秋は9校にふくれあがり、36試合を3週間7日間にわたって消化するという強行スケジュールでありました。連覇に然えた関大は美事に引続き6シーズン連続、21回目の優勝を8戦全勝で遂げたのであります。

国内の個人戦では、勢いのって西日本学生選手権大会において、大量の上位入賞者をだしました。フリーでは、フライ級岡田1位、ライト級中野1位、同長井2位、同大津3位、ミドル級倉橋1位、グレコでは、フライ級岡田1位、同平池2位、同高祖3位、バンタム級山本2位、同加藤3位、フェザー級佐藤1位、同石井3位、ライト級長井3位、ウェルター級井加田2位、ミドル級倉橋1位と健闘ぶりを示したのであります。

破竹の勢いを続ける関大を慕って、阿倍、北川、服部、平池、西岡、井宮等の新人がこの春入部しております。

## 昭和42年

この春岡田雅勝主将が、米国遠征のグレコのフライ級の日本代表として選抜されて、渡米しました。春のリーグ戦は、この年1月より改正された新ルール3分3ラウンド制で実施されることになりました。

「昨秋、6シーズン連続、21回目の優勝を果たした関大は中野、山本、佐藤という中、軽量級のポイント・ゲッター三枚を欠いたことは大きい、かつては層の厚さではリーグ1を誇った関大だが、ここの一、二年穴を埋める新人に恵まれず、年々戦力は下降線をたどっている。今年もまた、これといった新人に恵まれない状態だ。岡田を軸に長井、倉橋らがよほどがんばらないと優勝は危ぶない。」の予

想のもとに、関学に1敗を喫し、7勝1敗の同率でポイント数関大66、関学65のわずか1点差でよく健闘して、7シーズン連続優勝を遂げました。

この当時のレスリング部を次のように現役諸君は見ています。

現在のレスリング部員は、22名、やや少数の感があるが、徹底した精鋭主義をとっている。それによって精神力を育てあげ、少人数をカバーしている現状である。西日本に於ける実力は、勿論ナンバー・ワン、大学でのキャリアが最も長い4年生でさえ、団体戦で負けを知らない豪者ぶりである。3年間、つまり6シーズン連続優勝を遂げているわけである。しかしなんといってもここで問題になってくるのが部員数である。現在の強さを維持し、それ以上に延ばすためにも、又、学生生活としての課外活動を有意義に過すためにも、“同志”即ち部員を、もう少し増やすことが課題だと思う。この問題は、体育会のほとんど、どのクラブでも持つ悩みだと思うが、一般学生が体育会活動の認識を再検討すべき時期がきているのではないだろうか。毎年毎年何千人という多数の学生が入学して来るにも拘らず、我部に入部するものはたった5、6人といういささか情ない現状である。

さて、我々部員の今後の問題点について少し述べることにする。関西勢は関東勢に若干おされぎみであるということである。これは実績からして認めざるを得ない実状である。そしてこの差を一刻も早く縮めていくこと、即ち八田イズムでいわく「追い着き、追い越せ」というあの標語を、地で行こうとすることである。西日本で王座を保ち続けている本学だけにその先導責任を、大いに自覚しているし、又そうしたエリート意識を除外しても、現在の王座に甘んじず、更に一步、目標を高く持ってそれにばく進することが我々にとって最大の目標だと思うのである。

次に述べることは、希望になってしまうかもしれないが、まず将来、我々レスリング部の専門の道場が出来たらと思うのである。大学側の予算の都合もあると思うが過去実績のある我部のことなのだから、あっても決して不思議はなく、そう実績のない大学でさえ所有しているくらいである。8m四方のキャンパスの下に、1枚当り100kgぐらいある長いマットを8枚敷くのであるが、練習後、他のクラブに貸してしまわねばならないので、1年生にとっては、ずっと以前から愚痴の種となっている。実際あのマットを並べ、キャンパスを掛け、その上を消毒するとたっぶり1時間はかかってしまい、練習後それらをしまう時間を入れても1時間半もの長時間を無駄にしているように思い、いつも乍ら残念で仕方がない。

最後に我部の部員は、悔いのない大学生活を送れるであろう、ということである。規律にきびしい体育会において、レスリング部は自由の下に規律を重んじている。即ち、ハード・トレーニングに依る身体の疲労や減量による苦しさを上下の者が身をもって体験しているので、互いに寛容の精神が出来上がってきたのかも知れない。猛練習と規律のもとでレスリング道に邁進する姿は、まさにレスリング家族というにふさわしいものであると思う。だから猛練習の中にも充分楽しさはあるし、将来もこの楽しさは消えることはないであろう。何故なら“苦しみの中にも楽しさはある”ということ、部員全部が知っているからである。即ち自由の下の規律を重んじているわがレスリング部は、喜怒哀楽精神を基調にして、栄光を輝やかせた先輩のもとで、規律の下のレスリング家族を作り上げている。(関大スポーツ)

岡田主将以下、石井、大津、渡辺ら4回生を中心に猛練習を続けて、秋の連覇を目指しました。「ねらわれる立場の関大は長井、倉橋、岡田がポイントゲッターだが、全般的にみて昨秋から一段実力の下がったことはかくせない。春の関学戦に喫した苦杯を良薬として王座を守ってもらいたい。軽量級にいま一つ不安のあるのが気がかりなところだが、どのように直直ったかみもの一つである。」との予想でありましたが、このリーグより従来の11人制を9人制(F1名、B2名、Fe2名、L2名、W1名、M1名)に変更となったのが幸いしたのか、全勝で8シーズン連続の偉業を打ち立てたのであります。

チーム力全体としては低下していましたが、個人的には相変わらず西日本学生の王座に多数が君臨しておりました。西日本学生選手権大会のフリーでは、フライ級平池2位、バンタム級岡田2位、ライト級長井1位、ウェルター級倉橋1位、グレコでは、フライ級平池1位、バンタム級岡田1位、同西野3位、フェザー級石井1位、ライト級長井1位、ウェルター級倉橋1位でありました。また全日

本学生選手権大会にはグレコのライト級に長井が3位に入賞しております。この年の新人は、尾上、川那辺、富田、増田らが入部しております。

この年西脇コーチがソ連遠征チームのコーチとして指導にあたり、日本代表チームのコーチの任を務めております。

関西大学レスリング部OB会副会長

関西大学レスリング部元監督

大阪府アマチュアレスリング協会理事長

(財)日本アマチュアレスリング協会理事